「お菓子の好きなパリむすめ」

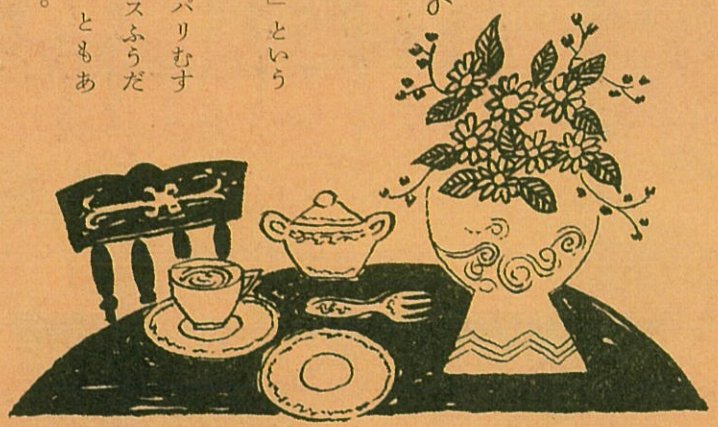
村田紀子

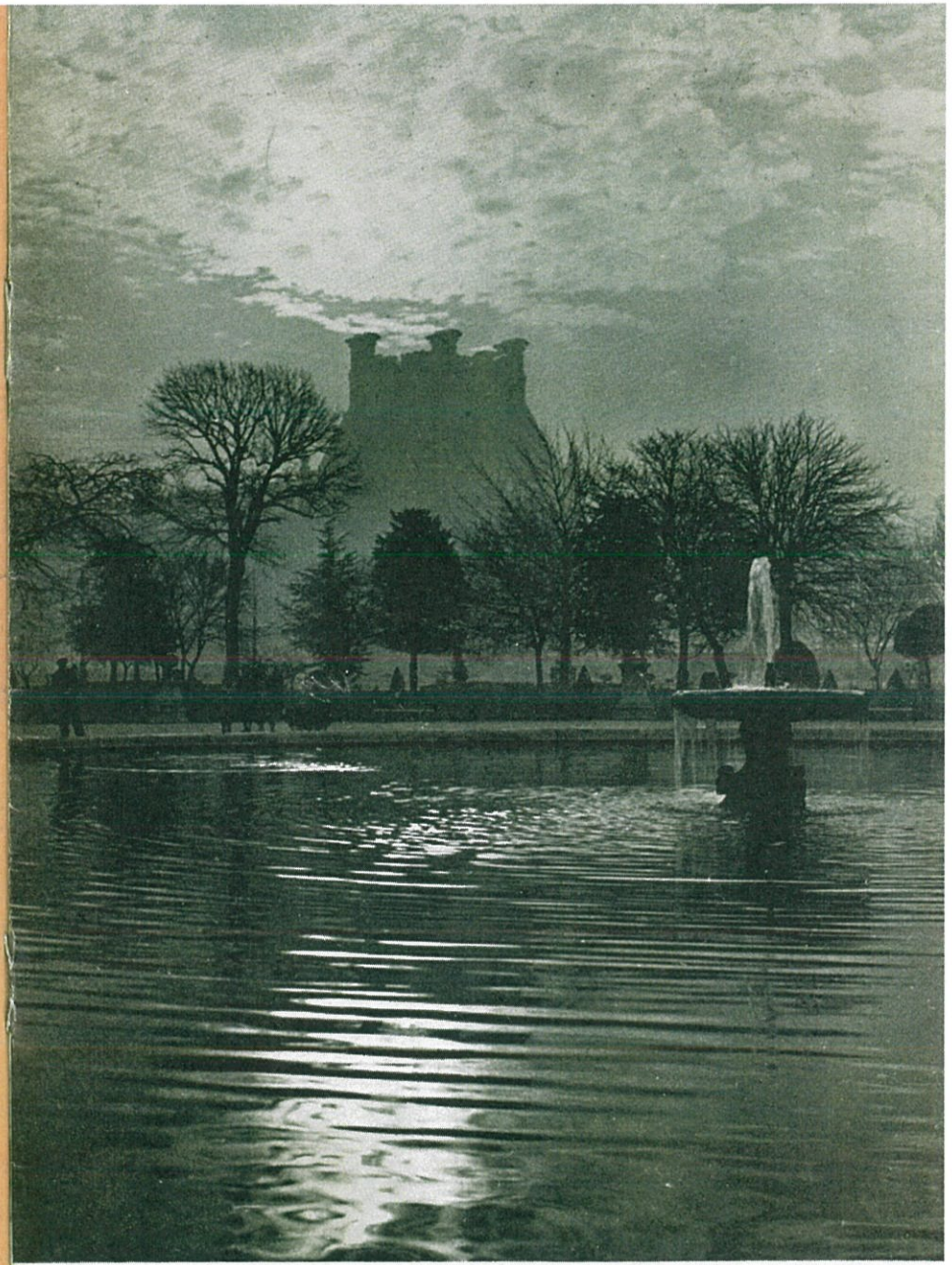
深尾須磨子さんの詩にあったかしら、「お菓子の好きなパリむすめ」という句。

その詩に譜がついていて、よく歌ったものだった。お菓子の好きなパリむすめに限らず、東京むすめも大好き、殊にコロンバンのお菓子はフランスふうだから、「お菓子の好きなパリむすめ」に一脈つうじるところがある。ともあれ、お菓子は東京といわず、田舎といわず、誰でも好きなものである。

左利きの人は甘いお菓子など好きでないと言うのだが、結構、両刀使いが多い世の中であるからおもしろい。

コロンバンといえばずいぶん長い歴史を持っている店で、戦争のずっと以前





PARIS — Bassin des Tuileries. (Ph. Molinard, Couleures du Monde)

のことであった。ご主人がフランスから帰って来たのだったか、それともフランス料理の通だったのか、わたしの住んでいるこの大森の線路に近いところに、その頃では珍らしい洋ふうの店のしつらえで創業されたのである。

友人から紹介されて行ったのがはじまりで大森の時分は、頻繁に行ったのだが、銀座の方へお店を持つようになってから、わたしはあまり行かなくなった。

小さい子どもを育てていた最中で、家を明けることがわりあい少なく、銀座などというところは、おとぎばなしの国のようにしか思えなかった時代もあったのだ。

それでもコロンバンの名は耳の底にしっかりくっついて、主人が会社の帰りには、おりおり、コロンバンの箱を下げて来たものである。その紙箱をたのしんであけて、お菓子を味わいながら、銀座の街の風景をあれこれと想像するけちくさい家婦型のわたしであった。その時分、銀座とわたしのつながりは、コロンバンのお菓子の箱で保たれていた。

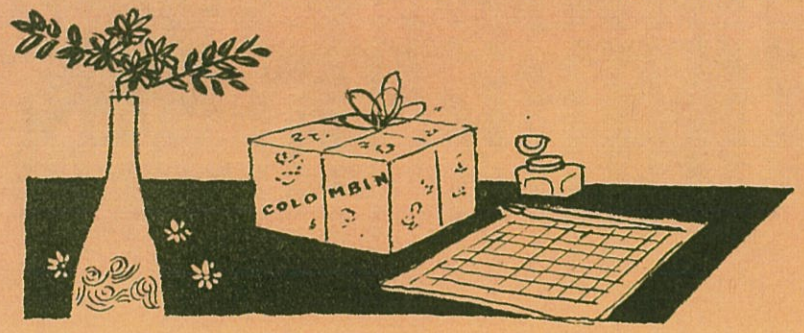
そして、今になると、もう子どもは大きくなり、彼女自身が親で、こちらは祖母という役わりである。

このごろでは、わたしも銀座へ出てゆく時間もあり、西洋菓子を食べるゆとりもあるのだが、さて、今度は家事以外の用事に追われて中々銀座へあそびに行く時間のゆとりは得られない。

相変らず、わたしはコロンバンのお菓子をたのしんで食べているが、やっぱり人任せで買って来て貰うのである。

コロンバンはやっぱり最初からあるほうの店がわたしはいいので、いつもそっちのほうをと注文する。

「お菓子の好きなパリむすめ」の夢はずっと昔のころで、今はもう年老いた日本の女だけれども、お菓子の好きなことは、誰にも負けない。それはますますつよくなるらしい。

銀座の街とはえんの薄いままで暮すのだろうが、お菓子の店とのえにしは強くなる一方であろう。

（ユネスコ国内委員会委員）